

の大部隊であった。ドラム缶をつないだような太い砲身、魚雷のような砲弾に肝をつぶしたが、無線通信の特技を持っていたので、早速暗号や無線の教官を命ぜられ、小柄で非力な身に激烈な砲兵教育を受けずに済んだのは幸いであった。

終戦の時、部隊はソ満国境、琿春の八道河で陣地構築中であつたが、ソ連軍戦車はそれを百も承知でいきなり背後から侵攻してきた。指揮班にいた私は砲の始末がどうなつたかも憶えておらず、アレヨアレヨという間に降伏。歩いて国境を越えてソ領に入り、十一月頃貨車に積まれて北上、更に西に向かいイズベストコーワヤという町で下車した。後で聞いたことだが、ここから北へ支線が延びて、クレドール、テルマ、ウルガルを経てバム鉄道（第二シベリア鉄道）の建設に、万余の日本将兵が従事させられることになる。

鉄道路盤工事に必要な砂利降ろしが主な仕事であつたが、驚いたことには工事用のトラックやクレーン等はもとより、三度三度の食糧までUSA製であつたことだつた。

収容所は丸太をふんだんに使つたログハウスで、ペーチカも設けられていて、厳寒期の辛さが私には耐えられなかつたという印象が薄かつたのは、次のような幸運に恵まれたせいもある。

入所して間もなく、炊事要員の募集があつたとき真っ先に手を挙げて、翌日から炊事に入つたことである。抑留生活の最大辛苦の一つ、「飢え」から救われたこと。これは何にもまして天与の至福と思われ、抑留時代の暗い印象から救われた思いがするのである。

シベリア 想い出の一部

岐阜県 加藤 豊

悲惨な第二次大戦開戦直後の昭和十七年一月十日、中部第八部隊へ現役入隊し、満州第五六部隊、通称名第一三国境守備隊へ転進した。当部隊は、黒河街よりアムール河上流約二十キロメートル付近の流深部を国境と定め、岡大佐統率の下に歩兵四個中隊「江上中

佐」、砲兵二個中隊「吉田中佐」、工兵一個中隊「福井大尉」の計二千人弱で守備、「侵さず、侵されず」の態勢にあった。近くには関東軍とは表裏一体の青年義勇隊があり、軍事教練をはじめ指導と面倒を見ていた。なお、満州の国境全線には一七国境守備隊が配備されていた。

やがて千葉陸軍野戦砲兵学校幹部候補生隊をはじめ、移動を重ねて北朝鮮平壤独立野砲一〇連隊へ編入。二十年九月二日、三合里廠舎へ集結を命ぜられ、四個中隊で一個大隊千人の大隊を編成し、平壤付近の作業に出役。三月末に至り、日本海側の興南へ移動、少年院へ収容され、同港よりポセツト港へ上陸。シベリア大陸を西進、アルマアタに下車。建設関係をはじめ、煉瓦工場等に就労。続いて、ソ連の犯罪者さえ恐れられたカラカランダへ移動した。ソ連では第三位の炭坑であり、日本の国内全出炭量より多いと言われていた。ドイツをはじめ、各国の抑留者が働いていたが、さすがにドイツ人は優秀であると感じることがあった。当時、ソ連の警備兵に悪質者がおり、ちょっとしたトラ

ブルから射殺される直前に、部下の兵長と私の信用していたパリスという監督に助命されたこともあった。

やがて待ち続けた帰国の時期が訪れ、昭和二十三年九月二十六日、遠州丸で東舞鶴の土を踏むことができた。当時の極限生活は五十数年過ぎた現在でも夢を見て目を覚まし、一生忘れることができない。

酷寒と飢えと重労働に耐え切れず、異国に散った戦友に深い祈りを捧げて哀悼の意を表します。

抑留記

静岡県 安江 進

私は、昭和十六年四月富士宮市富丘国民学校高等科を卒業。同年四月一日満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に入所、三カ月の基礎訓練を受け、温かい母の心に背いてまでも大きな希望に燃え勇躍渡満し、旧満州浜江省一面坡大訓練所に入所した。そしてまもなく同年